

安部公房の読者のための通信 世界を变形させよう、生きて、生き抜くために！



月刊 もぐら通信

Mole Gazette for Kobo Abe's Readers

2012年10月31日

第2号

<http://abekobosplace.blogspot.jp>

あなたへ：
迷う事のない迷路を通して
あなただけの番地が届きます

電話

042-ABE-KOBO

FAX

042-KOBO-ABE

このもぐら通信を自由にあなたの友達に配付して下さい



目次

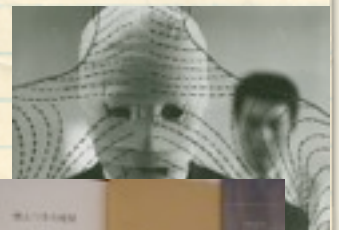
1. 安部公房の生涯：wlallen... page 2
2. 安部公房ゆかりの地、旭川を訪ねて：岩井枝利香... page 5
3. 「デンドロカカリヤ」の同時代性-戦後の植物-：富士原大樹... page 6
4. 「砂の女」について：柴田重宣... page 8
5. 安部公房記念館を構想する：HIROSHI OKADA... page 11
6. もぐら感覚4（触覚）：タクランケ... page 14
7. 安部公房誕生の秘密～安部ヨリミの「スフィンクスは笑う」を読み解く～：岩田英哉... page 18
8. 18歳、19歳、20歳の安部公房：鷹岩田英哉... page 23
9. もぐら通信の編集方針... page 26
10. 編集者短信... page 27
11. 編集後記... page 28

2012年10月27日アメリカNYのVintage Books & Anchor Booksから安部ヨリミ著「スフィンクスは笑う」についてのエッセイが発表されます。

"Next, second issue is now scheduled to be released on 27 Oct, 2012 where you may find an article about essay on "Sphinx laughs" that was written by Abe Kobo's mother, Yorimi Abe and on why and how "Abe Kobo" was born as such kind of ..." 0)

関西安部公房オフ会の
9月の読書会は
「他人の顔」でした。次回は「燃えつきた地図」です。お問い合わせは：

hirokd267@gmail.com



安部公房の生涯

wlallen

○初めに

この小冊子を手をしている方は、きっと安部公房の名を知っているに違いありません。しかし、もしかすると中には彼の小説が難解だと思ひ込み、腰が引けている人もいるかも知れません。疎外・不条理・シュールレアリスム・実存主義・共産主義・アヴァンギャルド、そんな難しい概念の知識が彼の小説を読むために必要なのだと。

しかし、小難しい概念の知識は要りません。なぜなら、私自身が分かっていないからです(笑)。それでも読むことが出来るのは、彼の小説が面白いからに他なりません。それは、あなたも読めばきっとわかるはずです。事実、うれしいことに、新しく若い読者が増え続けているのですから。さて、この稿では、安部公房の生涯を簡単に紹介させていただきます。

○私の読書遍歴

まず、私の読書遍歴を語らせて下さい。私は、高校時代に理系コースを選び、国語が大の苦手でした。記述問題が大半の大学入試の国語もヒヤヒヤものでした。そんな私が、ノーベル文学賞目前だったと言われる安部公房のことについて書くのも不思議な話です。

しかし、後に安部も理系だと知り、またネット上で、理系の安部ファンが少なからずいることを知り、親近感を覚えました。彼のテクノロジーへの考察は鋭く、特に1955年に発表したSF『第四間氷期』は、重厚なテーマとエンターテインメントを両立させた素晴らしい小説だと思います。ところが、その頃の私は、安部公房には目もくれず、夏目漱石や芥川龍之介などの明治大正文学をよく読んでいて、これこそ「純文学」なのだと思っていました。

さて、大学に入学して、ある日SF好きの先輩に「SFは科学フィクションの設定

だけで、人間が描けていない」と挑発的な発言をしたところ、「そんなことはない。SFだって、人間を描ける」と反論されてしまいました。その件がきっかけ

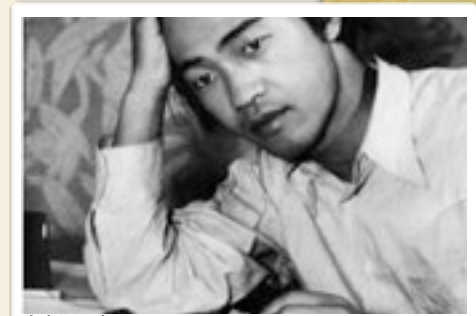
で、私は「純文学」など幻想だと気づかされ、読書の範囲をSF、ミステリー、現代小説やノンフィクションにまで広げました。そ

の中で出会ったのが、安部公房の『砂の女』でした。この小説を読んで、天地がひっくり返る思いがしました。常識が完全に破壊されました。この作家は只者じゃないと直感的に思いました。これをきっかけに、安部の小説を読みあさり、ホームページを立ち上げることに至りました。

○安部公房の生涯

1924年3月7日に東京府(現東京都)に父浅吉(香川出身)と母ヨリミ(徳島出身)の長男として生まれました。本名は「きみふさ」で、ペンネームが「こうぼう」です。ちなみに、この年はフランツ・カフカの没年でもあります。不思議な偶然ですね。浅吉は医師でエスペラント語に通じ、コスモポリタニズムの人だったと言われています。ヨリミは、作家でもあり、『スフィンクスは笑ふ』を発表しています。最近、講談社学術文庫から『スフィンクスは笑う』として再刊されました。

次男春光、長女洋子、次女康子の四人兄弟でしたが、洋子は幼くして他界しています。原籍は北海道上川郡東鷹栖村(現：旭川市東鷹栖)です。



安部公房

出生した翌年に、満州に渡ります。幼少期を満州で過ごした後、日本に戻り成城高校に入学しました。その後、東京帝国大学に入学しました。

1944年、軍部の知人から「敗戦が近い」との情報を得て、肺結核の診断書を偽造してもらって、満州の実家に戻ります。その時、友人金山時夫も一緒に満州に渡りました。金山は客死し、安部は真善美社版『終りし道の標べに』（全集001）の献辞で彼の死について悼んでいます。

私なぞは、いくら実家とはいえ、このタイミングで満州に渡るなんて、非常にリスクの大きい行為とってしまいます。しかし、学徒出陣も叫ばれていた中、安部は徴兵や本土決戦から逃げたのかもしれませんが。満州に戻りましたが、浅吉は勤務していた病院でチフスに感染し死亡します。

敗戦後、一年間ほど市内を転々としながら中国に残りました。サイダーを売って、生計を立てていました。この体験が影響しているのか、『終りし道の標べに』の主人公はサイダー技師です。

さて、満州国崩壊後の生活はどのようなものだったのでしょうか？意外にも、なんとか暮らせていました。無政府状態、無警察状態の中で、安部が見たのは、いつもと変わらない「都市」の姿でした。インフレはひどかったですが、誰が担保してくれるかわからないような紙幣などが通用していたのです。安部は「あの時くらい国家権力の存在理由を疑わしく思ったことはないな」と述べています。（「破滅と再生 2」（全集028））また、八路軍（共産党軍）と国民党軍との衝突も、暗黙のルールのようなものがあり、いきなり暴力が行使されたわけではなかったようです。（「都市への回路」（全集026））

中国から引き揚げ後、一時北海道の祖父母の家に住みました。その後、東京大学に戻り、医学部を卒業しました。その際の口頭試問の内容には諸説あります。詳しくは、ブログ「安部公房の広場」の「ウィキペディアの記述を正すの記」(http://abekobosplace.blogspot.jp/2012/10/blog-post_19.html)を参照してください。結局、

医師にはならず、詩人・小説家の道を歩むこととなります。

1947年、画家山田真知子と結婚しました。安部真知と名乗り、本の装丁や舞台美術を手がけました。後年、二人の間に長女ねりが生まれます。名前の由来は、宮沢賢治の『グスコーブドリの伝記』に出てくるグスコーネリから来ています。

同年、ガリ版刷りの『無名詩集』を自費出版しました。後年、「詩は死んだメディア」に類する言葉を安部は言っていますが、彼は生涯詩人だったのだと思います。各作品のエピグラムなんて、私は詩そのものだと思っています。

例えば、「都会一閉ざされた無限。けっして迷うことのない迷路。すべての区画に、そっくりの番地がふられた、君だけの地図。だから君は、道を見失っても、迷うことは出来ないのだ。」（『燃えつきた地図』）というものがあります。また、「都市一墓場のカーニバル。厚化粧した廃墟。」（『笑う月』）も好きな表現です。

1948年に、真善美社から処女長編『終りし道の標べに』が刊行されました。これは、高校の恩師阿部六郎（ドイツ語教師）を通して、埴谷雄高に紹介され、彼に高く評価されたことが大きいと思います。

1951年、「壁—S・カルマ氏の犯罪」で芥川賞を受賞しました。その後、「バベルの塔の狸」「赤い繭」「洪水」「魔法のチョーク」「事業」を合わせて『壁』として出版されました。

1954年、処女戯曲『制服』を発表しました。演劇にも力を入れ、『友達』や『幽霊はここにいる』など素晴らしい戯曲を書きました。これらはよく再演されていますので、機会があれば観覧されるのも良いでしょう。また、1973年に自身で安部スタジオを立ち上げ、俳優を育て、公演活動を行いました。しかし、1979年の『仔像は死んだ』の上演を最後に、活動は中止されています。

1962年、40歳手前の円熟期に、短編『チチンデラヤパナ』を原型とした代表作『砂の女』

を発表します。この作品は、読売文学賞とフランス最優秀外国文学賞を受賞しています。世界各国で翻訳出版され、非常に高い評価を得ています。また、安部の脚本で、映画（勅使河原宏監督）やラジオドラマにもなっています。

1973年、衝撃的な問題作『箱男』を発表します。主人公が誰が誰だかわからなくなる究極の迷宮小説です。また、八枚の写真も付いてきます。写真と本文の関係も興味深いです。安部はカメラ好きで、その写真も安部自身が撮ったものです。「カメラによる創作ノート」や「都市を盗る」（共に全集026）でも、安部の写真が見られます。また、浅吉氏もカメラマニアで、自宅に暗室があったそうです。（「都市への回路」）

いち早く、シンセサイザーを購入し、演劇に活用しました。その当時、安部以外所有していたのは、NHKと富田勲しかいなかったらしいです。

また、ワープロもいち早く導入し（NECのワープロ2機種、少なくとも後で購入したのは『文豪』です）、1984年にワープロで『方舟さくら丸』を執筆しました。ガリ版刷り、万年筆、ワープロと安部の生きた時代のメディアやツールの遍歴が伺えて興味深いです。また、この頃は既に、調布市の自宅を離れ、箱根の仕事場で執筆活動を行っていました。

1993年1月22日、急性心不全のために逝去されました。享年69歳でした。遺稿『飛ぶ男』は、真知夫人の改稿後、刊行されました。また、「新潮電子ライブラリー」から、3.5インチのフロッピーディスクで『飛ぶ男』が発売されました。残念ながら、現在これを読める端末は販売されていません。その後、ほどなく真知夫人も逝去されました。

以上、駆け足ながら安部公房の生涯を振り返ってみました。

あなたの安部作品に触れる一助になれば、幸いです。

○作品の入手方法

主要な作品は、新潮文庫で読めます。以前は青色のカバー背表紙でしたが、最近改版されたものは銀色のカバー背表紙です。その他の作品、対談、エッセイ等は、編年体が特徴の『安部公房全集』（新潮社）（全30巻）を読んで下さい。

また、近年安部ねり著の『安部公房伝』（新潮社）や研究者などによる安部公房関連の評論本や研究書が次々と刊行されています。

参考文献：『日本文学アルバム 安部公房』（新潮社）「略年譜」

(w1allen, ホームページ「安部公房解読工房」：<http://www.geocities.co.jp/bookend/2459/novel.htm>)



安部公房ゆかりの地、旭川を訪ねて

岩井枝利香

去る二〇一二年二月三日。北海道小旅行の折りに、旭川にある「安部公房文学室」を訪問しました。郷土誌「あさひかわ」の編集室も兼ねており、公房のご親戚である渡辺三子さんの貴重なお話をきくことができました。本来は、木曜日のみ公開しているのですが、ご自宅が隣接しているため、突然のお電話にもかかわらず快く開室してくださいました。

編集室があるのは、旭川市宮下通七丁目駅前ビルの六階。三子さんにお電話を差し上げた際には、「なかなか分かりにくい場所なので、迷ったらお電話して下さい」とおっしゃっていたので、お約束の時間までに無事に到着できるか心配でした。初めて訪れる旭川でしたが、駅を出てからおよそ五分ほど探し、ビルを見つけることができました。そして、いよいよ六階の編集室へ。玄関には「郷土誌あさひかわ 安部公房文学室」の看板があり、期待に胸が高鳴ります。緊張しつつ戸を叩きますが、返事がありません。まさか間違えたのだろうかと思いつつ、思いがけず隣室の戸が開き、笑顔の三子さんがいらっしゃいました。私は、誰もいない編集室の戸を一生懸命叩いていたのでした。

ご挨拶をして、お部屋にお邪魔しました。「あさひかわ」のバックナンバーが高く積み、その先にはオフィスデスク。そして更に奥の間へ。想像していたよりも小じんまりとしましたが、全てが公房の資料で埋め尽くされていました。三子さんは、外は寒かったでしょうと言って石油ストーブをつけて下さり、お飲み物までご馳走してくださいました。

展示品には、『新潮 日本文学アルバム』に掲載されている写真もあれば、初めて拝見するものも多数あり、公房直筆のサイン本だけでなく、キーン氏のサイン本など、非常に貴重な資料が揃っていました。三子さんがひとつひとつ

解説して下さいるので、公房ファンは是非一度は訪ねて欲しいと思います。また、写真撮影をしても良いということで、何枚か撮らせていただきました。(Facebookにて公開しております。：<http://goo.gl/PQ9c6>) 帰りには、折角遠いところから来てくれたのだからと「方舟さくら丸」の初版本と、数冊の「郷土誌あさひかわ」までいただきました。



渡辺三子さんには、貴重なお時間とお話を提供してくださり感謝の気持ちでいっぱいです。

「安部公房文学室」には、また機会を見つけて伺いたいと思います。そして何よりも、資料の散布が騒がれている作家ですので、安部公房文学館建設の夢に思いを馳せつつ帰路につきました。



「デンドロカカリヤ」の同時代性—戦後の植物—

富士原大樹

これは作成中の私の卒業論文の一部で、安部公房の「デンドロカカリヤ」について書いています。ここでは「デンドロカカリヤ」について、戦後の「時代性」から考えていこうと思います。まだ詰め切れていない部分もありますので、何かしらのご意見を頂ければ幸いです。(https://twitter.com/hiro314_turbo)

まず、この作品はご存じのように1949年に発表されています。そして、この作品内で用いられている言葉には、当時深い意味を持っていたと考えられるものがあります。それは「緑化週間」です。

これは「緑化運動」の計画の一部に当たるもので、1948年2月に建設院弘報課が発行した「都市緑化運動実施計画指針」の計画要綱の中に書かれており、「地方の事情に応じて適宜一週間を選び、強力な運動を展開する」週として制定されています。「緑化運動」の実施項目の「緑化思想の普及に関する事項」の中には、作中でも出てきた、パンフレットやポスター、標語などの作成といった項目があります。また、その緑化運動の趣意書には以下のように書かれています。

祖国日本の国土の荒廃、或いは道義の頹廃を前にして、速やかにかつ健全に文化国家建設の歩を進めてゆかなければなりません。(中略)都市においては、得難い自然が心なく破壊されることが多く、都市生活者の保健上精神上に及ぼす悪影響は測り知れぬものがあります。

つまり、「緑化週間」と言う運動には当時、単に植物を増やすということ以上に「保健上精神上」の悪影響を防いで「道義の頹廃」から立ち直り、「速やかにかつ健全に文化国家」として復興していく事を目的としていたということが出来るでしょう。第三の変身の時の場が焼跡であるという点からも、このこととの関係を見ることのできるのではないのでしょうか。また、

「H植物園長」は、植物園に来たコモン君に、「今日は緑化週間の花形、植樹デーなんです」と語ります。コモン君は「緑化週間の花形、植樹デー」に「政府の保証付き」の植物園に「デンドロカカリヤ」として収められる事になるのです。



Dendrocacalia crepidifolia

この事から、物語の結末は、コモン君が復興を目的とした「植樹デー」のために利用され復興に身を捧げることになる、というものとして見る事が出来るでしょう。戦後復興を目指していた当時の日本では、国全体が戦時中の軍国主義的な体制を脱し、「文化国家建設」に向けて進んではいきましたが、その裏には過去の否定に対して馴染めずにいる存在や、無自覚にその反転を受け容れ、流されている存在があり、戦前の裏返しとしての「文化国家」を目指す社会が存在していたと見る事が出来るでしょう。

語り手である「ぼく」は、停留所に向かいながらコモン君に対して、植物化する人間について語ります。通り過ぎたものにとられ、何物にも勝る「現在さえ喪くしてしまったり無理に追出したりしたら(中略)きっと植物になってしまうに違いないよ」と語り、「そら、ダンテの神曲にある

じゃないか。自殺した人間が樹になるんだ」と言います。ここからコモン君は「植物化」に対して、「神曲」や「ギリシャ神話」を通じて「自殺者への罰」という見方をするようになり、植物を「美しい犠牲だ」と考えます。これらの考えを見ると、植物化する人間は、過去に縛られ、現在を「追出した」人であり、それが即ち「自殺者」なのだと思えることができるでしょう。

コモン君は、「珈琲舗、カンラン」で、「あの人」に圧迫され、「例の緑化週間のポスターにまじまじと見入っていた」ことに気付いて変身を経験して以降、「K」という「時間の繊維」を「結び合わ」せる存在を失って、「恥じらいと絶望にうちめされ」ながら、逃げるように店を出て「流れに乗って」、「焼跡」へとたどり着きます。そしてそこで「一本の植物になり果てよう」とし、運よく植物から元に戻った時も「ぼんやり」と「訳もなく」行動しています。一度は「ギリシャ神話」などの、「H植物園長」から見れば「古い神話」を頼りに反抗を試みてはいますが、それ以外の場面では、まさにただ周囲に流され、最後には国家に利用される「植物」となってしまう。

当時の時代状況などのことを合わせて考えるとこのコモン君の在り様は、敗戦などの周囲の状況の変化によって拠り所を失くし、「文化国家」への反転、復興の精神などの「現在」に馴染み切れずに、最後にはそれを「追出し」てしまった人間の姿だと見ることが出来るのではないのでしょうか。コモン君は自身が流されているという自覚があったために、偶然に現れた植物化に抗っていたのだと考えることが出来るでしょう。

今回卒業論文での調査から出発し、テキストに従って論を広げていくという形を取っていたので、調査不足のところが多分にあるかと思います。安部公房自身の戦後のエッセイや、戦後の時代における「文化国家」や「復興」というものへの見方など

について調査することで、より確かな視点が得られるのではないかと考えています。

投稿の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの投稿をお待ちしています。

どうぞ、安部公房の作品を読んで、どんな感想、どんな印象、どんな一行でも構いません。

ご投稿戴ければ、ありがたく存じます。

あなたのどんな言葉も、安部公房という人間を考え、その作品を読むことにつながり、わたしたちの人生の意義を深めることでしょ。

編集部一同、こころからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

「砂の女」について

柴田重宣

今更ながら不思議な小説である。凡百の世評ある小説と一線を画す不思議さは、私の頭骨の内側に、しかもクモ膜と骨の隙間にびたりと張り付いてはなれない。発表されて50年も経つらしい。すでに高い評価が定着しているが、それとは別にこの小説の不思議さを少し吹聴したい。ここでいう不思議さとは面白さにほかならない。讚えたい気持ちを口に出す（紙に書く）のは極めて精神衛生によろしいと思うので、もぐら通信などという、全く自由な頭の使い方と全く自由な記述の方法が保証されている岩田氏主宰の誌面に、臆面もなく書き記すこととした次第である。

小説とは何かと考えざるをえないほど、この小説は散文表現の縁を辿っている。しかし、専門家は案外古典的に受け入れている。文庫版解説でドナルド・キーンはこういつている。

出だしから結末までギリシャ悲劇で認められるような、不可避的な進行で無理やりに読者を引っばっていく。寓話的な意味もあるだろうが、多くの寓話と違い、絶えず隠れている意味を熟考する必要もなく、むしろ推理小説として読んだ方が好いとすら思う。

ギリシャ悲劇に比するならそれは破格の名誉というべきで、言語における形式と舞台上の見せ方の様式美とが、今日に至るまで厳然と人間理解の深奥に迫る表現芸術の頂点にあるのがギリシャ悲劇である。ここで「砂の女」とギリシャ悲劇の共通点を探すつもりはない。いわゆるドラマを観客や読者に見せるのは、そうそう付け焼き刃ではできませんよと私はいつているつもりだ。

わが「砂の女」はその物語の語り方から観客（読者）を掴んでいく。

第1章1（引用はすべて新潮文庫版による。）のわずか3頁で、ひとりの男の消失が社会的客観性をもって描出される。お見事！としかいいようがない。初めの3頁で驚くなよ。作家の職人としての筆力に冒頭

から驚嘆する。この3頁は特殊な表現と効果を持ってあるべきところにある。しかし、職人はそのままでは芸術を作れない。表現になりえたところから芸術家である。わが作家は当然芸術家である。

第1章2からは文章を変えて、具体的なひとりの男の昆虫採集の装いでSラットホームに降り立たせた。



映画「砂の女」

小説は抽象的に概念を表記するものではない。具体的な言葉によるディテールによってそこに人物が生きていなければならない。登場人物が特定できれば必ずしも名前が必要ではないが、現にこの小説では男の名は明かされなくてもかまわない。しかし、失踪というかたちで男の存在が明らかになるのだから、失踪宣告申立事件の審判は必要であった。つまり仁木順平という固有名詞が必要だったのだ。失踪宣告と固有名詞と小説の中の具体的な男の関係は、寓意としても分かりやすく、この小説のシルエットを作っている。失踪宣告とは、7年間出てこなければ死んだことになるものである。生きているとは、7年間のうちに、必ず誰かと生きている事実が交差しなければならない。つまり、死んでも7年間分からなければならない生きていることになり、生きていても7年後には死んだことになる。人の世の暮らしは、そんな約束でできている。死んでも生きていて、生きていても死んでいるとは、この小説の面白さの内臓のようなものだ。

この小説は相反する表現に満ちている。流れる砂と固まる砂、構築と瓦解、抽象と

具象、現実と夢想、不安と充足、いなくなることにいること、硬いものと柔らかいもの、見えるものと見えないもの、秩序と混沌、まだまだあるだろうが、これらを羅列しただけで、この小説のどこを示しているか即座に思い当たるだろう。これは私の創出した概念ではなく、この小説が含んでいる世界の断面にすぎない。これらは世界をかたちづくるわれわれの概念の一部でもある。この小説にはこれら全てがある。つまり、どうやらこの小説は、われわれの存在する世界そのものを描いているようなのだ。不思議で面白い所以はここにある。

さて、小説はディテールが命だと前述した。

男はニワハンミョウという鞘翅目の虫を追って砂丘へたどり着いてしまった。

砂地に注目した彼の見当はどうやら間違っていなかったらしい。

こうして入り込んだこの村で一晩の宿となった家の女に風呂を頼む場面で、女とこんな会話がある。

「わるいけど、明後日にして下さい。」

「明後日？明後日になったら、ぼくはもういませんよ。」

そして結局、失踪宣告されるまで砂の女と砂の家に関じ込められることになる。最後はこうだ。

べつに、あわてて逃げだしたりする必要はないのだ。

ここへ来たばかりの彼の見当とはなんだろうか。教師の日常を一時降り

て、ニワハンミョウに誘われて砂地にやってきたが、どうやらこの砂地から逃げだそうとは思わなくなる先行きを見越していたのではないか。これが見当である。

男の突然の旅立ちから、からだか捉えられ、神経が捉えられ、砂に脅かされて逃げるができなくなって、そこに人間の宿命的な存在としてのざらつきを感じ、受け入れていくことになる。ありえない砂丘の村の蟻地獄の穴の中の家で、妙にリアルな砂にまぶされて、男は目先の女との暮らしに嵌り込んでゆく。この小説の真骨頂はここだ。砂のざらつきと女の官能的な存在感にある。リアルから始まり、嘘の村のありえない家で、リアルな逃げられない暮らしに文字通り埋没しかかって、失踪宣告に収斂されるとは、読者もまた、この砂に引きずり込まれてしまうのだ。小説を読む楽しみ、恐怖、慨嘆、懐かしさが私を掴んではなさなかった。

女や村人や砂捌きの作業や溜水装置、その他の目前の物や行動については巧みな現実の描写で実在感を感じることができ、砂と男の囚われ感が徐々に自分の意識を占めるようになると、表現は抽象的に遊ぶ。これは小説を読むという実時間の配分を、その質において書き分けるという芸である。ストーリーの展開スピードに合わせ、具体的表現と抽象的表現を使い分けている。読む者が頭に描くのは想像力が作る物の世界か、概念の世界か、作家はこれを支配できるのだ。この小説を読みながら何かを考えることはよした方がいい。浮かんでしまったイメージにしばし意識を委ねるのなら無理はないが、この小説は想像力を刺激はするものの、砂の不定形や皮膚感覚での面白さ以外に、筋道と目的を持つよう

な考える作業を考えてはならない。それは面白さから遠ざかるからだ。男と女と砂を辿り読み進めば十分この小説の面白さを辿ることになるのである。

中盤からの感覚はこうである。

逃げ道だと思って、身をおどらせた柵の間隙が、実は檻の入り口にすぎないことにやっと気づいた獣・・・何度か鼻面をぶつけて、金魚鉢のガラスが通り抜けられない壁であることを、はじめて知った魚・・・

この逆転の事実に気づくことこそ、この小説の世界観であり、われわれの世界の普遍的解釈でもあるのだ。この解釈は小説の最後に確信を持つようになる。しかもついに砂の底においてである。

いぜんとして、穴の底であることに変わりはないのに、まるで高い塔の上のぼったような気分である。世界が、裏返しになって、突起と窪みが、逆さになったのかもしれない。とにかく、砂の中から、水を掘り当てたのだ。

ここでもまた逆転に気づく。穴の底と高い塔、突起と窪み、砂と水。当初砂地に注目した男の見当は間違っていなかった。この小説世界はリアルな肌合い感覚を獲得しながら、読む者はそこから逃れられずに、われわれの信じているかのような物の存在をぐるりとひっくり返し、また元に戻し、ほら一体全体われわれが求めていたものは何、われわれが逃げたかったものは何かから、とカフカのようにカミュのようにサルトルのように近代から現代の世界の不安を描いて見せたのである。ここまで来ると、この小説は不思議でもなんでもない。私を捉えてはなさない不思議は、普遍でもあるのだ。



安部公房記念館を構想する

OKADA HIROSHI

昨年10月のこと、早くから安部公房と親しかった桂川寛氏が亡くなられた時、公房と同時代の方がこうしてだんだん少なくなっていくんだなあ感慨を覚えたことでした。それとともに桂川氏が制作に加わっておられた『世紀群』（1～7号、昭和25年）などの資料がどうなるんだろうと気にかかって仕方ありませんでした。というのはその数ヶ月前にも、安部公房の近い方への献呈署名入りの著作が古書店に20冊ほども現れたことがあったのです。その中にはかの『無名詩集』もありました。こうして貴重な資料がどんどん流出していくのを、指をくわえて座視していなければならないのか、と残念に思っていたのでした。

そうしていたところ、旭川の「安部公房文学室」（公房のいとこの渡辺三子室長）を今年2月に訪問された岩井枝利香さんがtwitter上で、渡辺さんが文学室の財源で苦慮されていることを伝え、資料収集について「もう、文学館か記念館立ち上げるしか収集する方法がないんじゃないかと思う」と悲痛な声をあげられたのでした。即座に共感した私は「#東京に安部公房文学館を！」というハッシュタグをつけて募金などのツイートをしたところ、多くの方の賛同を得ました。その中には全集の装幀をされた近藤一弥氏（事務所）の名もあり、安部ねりさんへのコンタクトの可能性も感ぜられたのでした。これは5月のことでした。

しかし、その後私事雑事もあり、個人としての限界も感じて私の発言は止まってしまい、賛同者の方々の期待を裏切ることになってしまいました。

でも今、私は強力なエンジンを得ました。それはこの「もぐら通信」です。現在、安部公房に関する定期刊行物として唯一のもの、と自負するこれはまだスタートしたばかりですが、その推進力は大きく強く、日々その可能性を拡げる活動をしています。ここにおいて「安部公房記念館」設立運動はただの夢ではなく、実現への実際的な力を得たことになったのです。来年は没後20年です。なんと

か形にしておかないと安部公房に対して申し訳ない気持ちです。もし今どこかで「安部公房記念館」設立の動きがあるのでしたらいいのですが。

「安部公房記念館」の必要性

（はじめに名称ですが、安部公房の活動は文学作品に限らず諸方面にわたっていることから「文学館」より「記念館」とする方がよいかと、仮に使わせていただきます）
現在日本には約550もの文学館があるという（全国文学館協議会による）。そして文学館協議会には99の文学館が集まっていて、そのうち個人名を顕彰する文学館は56あります。『日本の文学館150』（1999/10淡交社）という本もあり、各地にある文学館は文学の好きな人にとってその地に旅行した時には訪れるに格好の場所でよい思い出になるでしょう。しかし安部公房には旭川の「安部公房文学室」があるのみで、これも個人の努力によって維持せられ、週一日の開室にとどまっています。ノーベル賞級の世界的に評価の高い安部公房について、この状況はまったく不十分といわなければなりません。どうして安部公房の文学館がないのか、と声をあげなければ。

ではなぜ今「安部公房記念館」が必要なのか、記念館で何をするのか、を考えたいと思います。

安部公房記念館の目的を要約すると

国内外での活動を前提にした上で、

- (0) 安部公房の偉業を顕彰する。
- (1) 資料の収集
- (2) 資料の展示
- (3) 資料の閲覧
- (4) 研究活動
- (5) 普及活動
- (6) 交流の場の提供

さらには

- (7) 安部公房文学賞の創設
- (8) 安部公房劇場の付設

などに広がる構想への核になる施設であり、行動の拠点となるものです。以下、これに沿って主な目的についての想いを述べさせていただきます。あとの夢想と合わせてイメージをふくらませていただきたいと思います。

【安部公房の偉業を顕彰する】公房の不朽の業績は、常に時代に即し、広く世界に貢献する偉業であることを知るほどに痛感します。この事績を現前するモニュメントを設立することは、文字通り金字塔として人々の心に安部公房の功績を定着させ、あらたな未来への志向を産み育てていくことでしょう。

【貴重な資料を収集し、散逸から守ること】公房の同時代の人たちはどんどん少なくなっています。彼らに対する聞き書きを継続して安部公房の事績を記録していくことは、緊急事で時間との競争です。記念館がなくても今すぐ始めたいことです。そして彼らの所有する貴重な資料や世に散在する資料を集めるのも急がれることです。

【集めた資料を展示する】安部公房のファンは世界中にいます。その人たちが安部公房に直かに触れたいと思って日本に来ようとしても、行くところがないのです。ほかにも日本での会議や研究会に来られる研究者、一般の旅行者も安部公房に触れることなく素通りするしかありません。日本のファンも同様です。でも旭川の「安部公房文学室」には遠方にもかかわらず外国からの方も来られるそうです。そして地元の高校生も。高校生の時から安部公房に触れることができるとは素晴らしいことではないですか。そのような場所が東京にあれば多くの人を訪れるのは確かなことでしょう。

【データベースや資料をファンや研究者の閲覧に供する】全集にはとても詳しい参考文献目録が載っています。またその後もどんどん資料は増えています。それらをできるだけここで閲覧できるようにして研究などに役立てられるようにしたいものです。そこにないものはどこで見られるか案内します。

【安部公房の研究】記念館自身の活動としても、あらたな資料などから常に研究をし、そ

の成果を発表していくことも大切なことでしょう。

【安部公房の文学・思想・諸活動についての普及活動をする】現在の社会情勢は安部公房の思想をますます重要なものとしてきているように思われます。その普及のため講演会やシンポジウム、研究発表などを主催し、安部公房のあらたな価値を常に発信していきます。

【安部公房ファンの交流の場となる】安部公房に触れた安部ファンは心に感じた自分の想いを誰かに伝えてみたい、そして誰かの考えも聞いてみたい、そう思っても身近にその相手がいなければそれはかないません。ここへ来ればそんな相手が誰かいる、そういう場が欲しいのです。そこから何が生まれるか、その可能性は測り知ることができません。

安部公房記念館を夢想する

このように記念館の必要なことは述べてきましたが、ここからは自由に夢をふくらませていきたいと思います。乞うご笑覧。

さあ、安部公房記念館にやってきたよ。この地は公房の住んでいたところに近いのでなんとなく安部公房が身近に感じられてきた。おや、建物の外観はずいぶん変わっているな。ルーフが曲線でぐるりと輪を描いている。これはひょっとしてあの「メビウスの環」をイメージしているのかな。

ガラス張りの明るいエントランスで受け付けを済ますと、まず展示室だ。広い部屋に著作や自筆原稿、彼や家族の写真など、作家としての経歴がわかるようになっている。ガリ版刷りの『無名詩集』は輝いてさえ見える。彼の書斎の再現コーナーもあって、どれも興味深く見入ってしまう。ふと周りを見ると外国の人がかなりいる。さすがは世界作家の安部公房だ。若い人たちも多くて、高校生もいるのは頼もしい限りだ。

次の部屋も展示室だが照明がやや暗くしてある。映画・演劇関係の展示だ。安部公房スタジオをはじめ、公演の記録が盛りだくさんで、壁際にはモニターが並んでいて映画や演劇のビデオが見れるようになっている。さっきから流れている音楽は映画「他人の顔」のワルツではないか。

次の部屋にはなにやら機材が並んでいる。大きな机のようなものは初期のワープロだな。シンセサイザー、彼の愛用のカメラ、車の写真、かのチェジニーなどなど彼の趣味や興味の広さを示している。かかっている音楽は彼作曲のシンセサイザーによるものに違いない。多彩な活動を表すように次の部屋は彼が撮影した写真の展示で一杯である。裏通りの、ニューヨークの、ゴミ捨て場の、軍艦島の、と彼の視線を追う。一万点に上るといふ写真の中からのごく一部であるが、一枚一枚に迫ってくるものがある。

二階に上がると奥の広い会議場のような部屋ではなにか講演をやっているようだ。また別の機会にじっくり聞いてみたい。その手前のもう少し小さい部屋ではそれでも20人は入れる回廊のような席があり、さらにその内側に10人くらいのソファが輪をなして、サロン風である。この内側の席で議論しているのを外側の人たちがオブザーバーのように聞いていて、興が乗れば内に入って議論に参加することもできる仕組みらしい。読書会もここでできそうだな。

図書室もあって、安部公房の著作や関連する本、石川淳や埴谷雄高、ガルシア=マルケスなど関係の深い人の本も揃っている。探していた本をここで手にとって見ることができるのはありがたい。自分の書齋として毎日でも通いたいくらいだ。

コーナーにはパソコンが並んでいる。安部公房全集の検索や著作・研究など情報を常に更新しているデータベースを備えている。調べ物にはまずここだな。詳しくそんな人に聞いてみることも、同じ安部公房ファンということで許してもらえらるだろう。

休憩室の告知板には、安部脚本による演劇公演の案内や「読書感想文コンクール」、読書会、朗読会の案内など、そのわきに「記念館ニュース」のパンフや「もぐら通信」も置いてある。(笑)ひととき大きなポスターは「安部公房文学賞」の創設の告知だ。毎年の惰性的な

選定ではなく、安部公房文学にふさわしい実質に価値のある作品・活動に対して与えられるという。またフランスから外国文学賞をもらった安部公房にふさわしく「安部公房外国文学賞」もあるのは世界への呼びかけとなるだろう。

この記念館にはなんと別館があるのだ。その地下は安部公房の作品世界を体験できるミニテーマパークのような空間である。例えば『砂の女』の砂のすり鉢の下の住居で傘をさして食事するシーンの体験とか、『他人の顔』の他人のマスクの装着とか。『友達／闖入者』の部屋では、実際闖入者が押しかけてきて、やりとりにあせることになる。

何気なく入った部屋には死体があって10分以内に処理して隠さないと不条理な裁判にかけられるというのは『無関係な死』の部屋だった。もちろん『箱男』の段ボール箱もたくさん備えてあってそれをかぶって自由に館内を歩き回ることができる。安部公房の作品世界は実際やってみるとあらたな感覚を得られるだろう。少々怖いところがあるが「お化け屋敷」のような興味をそそるかもしれない。

この一階は「安部公房劇場」となっていて、常にどこかの劇団が安部公房の戯曲を演じていて、その都度あらたな価値・解釈を生み出しているのだ。この記念館を訪れる人の大きな楽しみとなるだろう。

.....

「安部公房記念館」を実現するためには、多くの方のご賛同とご協力が必要です。設立への力を結集し、ぜひ実現にこぎつけたいものです。

(「記念館の目的」には岩田英哉氏のご協力をいただきました)

もぐら感覚4：触覚

タ克蘭ケ

前回の2において、安部公房の10代に既にもぐら感覚のあることを言い、3において、最晩年のもぐら日記とアメリカの友人宛の書簡にもぐらという言葉が出てくることを言いましたが、しかし実際にこの言葉を最初に使った一番早い例は、どこにあるのでしょうか。

安部公房というひとは、滑走する手術台であれ、手であれ、顔であれ、窓であれ、贖の父親であれ、箒隊の老人であれ、廃棄物とゴミであれ、便所であれ、洪水であれ、無名の主人公であれ、病院であれ、制服であれ、泥棒と探偵、洞窟と迷路、自分の部屋（空間）、そこからの脱出、自己から自己への再起的な回帰であれ、自由と孤独の透明感覚であれ、ノアの箱舟であれ、何であれ、自分の子供のころ、少年のころ、あるいは青年のころに抱いた形象とイメージとモチーフを生涯大切にし、育んだ作家です。

もぐらも同様です。

「終りし道の標べに」（初版。真善美社版。1948年。24歳）につぎの箇所があります。

「愚かな瞳が一切の斯く在る<<存在象徴>>を、一切の問題、下降すべきものの母体、例えば人間・社会・科学・生命等に転化すべきであり、またしたはずだったのに、私はそのせつない象徴の統一をまるでもぐらのように、粘土を愛するはしたない仕事にしてしまった」（下線部は原文は傍点。全集第1巻。384ページ）

この言葉から、安部公房は象徴を統一しようと考えていたことがわかります。

結局、初版のこの小説を読むとよくわかりますが、この存在象徴とは、経験をすっかり一回忘却して、時間のなかで想い出し、それらをそこで再構成するその

ときに現れる現実を存在象徴といっています。

すっかり現実のできごとを忘却して、ある状態に自身を保持して、それよつて時間中前分自身をもめた物の在り方を象徴、存在の象徴、または存在象徴と呼び、それらの象徴を統一すること、現実と等価な第2の現実を創造することが、安部公房の手記の主人公の目論んだことであり、生涯に亘って、安部公房が行って来たことなのです。



これは、安部公房の生涯に亘る、どのジャンルに於いても、唯一の、普遍性を持った創作の原理的な方法でありました。

このように自分自身を保持すべきある状態のことを、後年安部公房スタジオで後者に説いた用語で言えば、それは、ニュートラルな状態ということです。

この用語を使って、この終りし道の標べにという小説を一言で言えば、ニュートラルな状態を創出し、保持する個人の苦闘の手記ということになるでしょう。

話が飛ぶようですが、後年安部公房が賞賛したエリアス・カネッティもその一連の自伝の中のある箇所、同じことを言っております。作品をつくることを以て、第2の現実の創造としたことは、ふ

たりに共通の考え方です。安部公房がカネッティを称揚した理由は、この安部公房の小説の方法論、考え方が一致しているところにあると思います。

さて、このように世界を創造する安部公房の生理的な感覚をあらわすのが、もぐら感覚です。

もぐら感覚が既に10代の安部公房の造形的な感覚であることを述べましたが、ここにある粘土への触覚も、また同様の感覚です。この粘土に触る感覚は、安部公房の生理的な触覚です。手で触る、触覚であるということが、大切なのです。

「終りし道の標べに」の主人公は、粘土塀に手形をつけ、それが時間の中で、また時間の中で変化する自分の意識の中で、変わらぬことを念願しますが、粘土塀に手形をつけるという触覚は、生理的な触覚として、現実を再構成するために必要な感覚なのです。主人公の独白言葉を借りれば、次のようになります（全集第1巻。385ページ）。

「誇り、神秘、そうだ、一切の言葉は外からではなく内から見なければならぬのだ。存在象徴を此の一步々々で踏みしめるのも、やはり内から見た言葉だけが語り、また聞き得るだろう。」

安部公房の文章は、いつも言語との関係に於いて、このような生理的な細部の感覚を抜きには、あり得ないことに気づきます。

安部ねりさんの著した「安部公房伝」（26ページ）に、母、ヨリミについて、次の文章があります。

「ヨリミは特に公房の養育に熱心だった。公房につききりで勉強を教えた。ヨリミは、師範学校で学んできた文学理論を、公房に伝えた。（略）リアリティの手法として、「隠す」という表現や、細部を具体的に表現することによって感覚を伝えることなどをヨリミは教えた。」

または全集第30巻（615ページ）には、ヨリミについての次の記述があります。

「ヨリミは特に公房の養育に心血を注いだ。ヨリミは、師範学校で学んできた文学理論を、公房に伝えた。細部を具体的に表現することによって感覚を描くこと、など、つききりで勉強を教えた。」

母、安部ヨリミが安部公房に影響を与えたことは間違いがないでしょう。しかし、影響とは何でしょうか？

それは、安部公房がその母の言葉とものの考え方を、一体どのように自分のものとしたかをみるということでしょう。そうであれば、間違いなく、ニーチェやリルケやハイデガーやエドガー・アラン・ポーなど、またその他の場合がそうであるように、安部公房は、独自の考え方で、その言葉、その物の考え方を換骨奪胎して、自由自在に変形させ、自家薬籠中のものとしたことは間違いがありません。

安部公房の変形能力については、別に稿を改めたいと思います。

追記：

「「明日の新聞」を読む」という対談（全集第28巻。294ページ。1986年。62歳）で、安部公房は、「僕はめったに自作を読み返さない。読み返さないし、すぐに忘れてしまう。」と述べています。

しかし、この稿の冒頭で述べたように、安部公房の同じイメージとモチーフは、手を変え品を変え、繰り返し、登場して来ます。安部公房のような自己参照的な作家、再帰的な作家は、やはり自作を繰り返し読んだと、わたしは思います。同じタイプの作家に、わたしの好きな作家で、トーマス・マンというドイツの作家がおります。わたし自身が再帰的な人間、自己参照的な人間なので、同種の作家を好むということなのでしょう。

何故、安部公房は自己参照的、再帰的なのかと言えば、自分をニュートラルな状態におくということは、安部公房のすべての主人公がそうであるように、自分自身を無知で無名な位置におくということだからです。そうして、無知の眼で世界を眺める。

無知で無名な人間は、決して他者の言葉から何かをひいてくるのではなく、自分自身の言葉で、その言葉との関係で、物事を考えるために、自分自身の言葉からひいてくるのです。それほど、孤独だということです。安部公房の主人公達の言葉と意識がみな、どこか独白的な性格を有しているのは、このことによります。

このことと、あるいはこの再帰感覚と裏腹の関係にあるのが、作品の自己増殖性という感覚です。このような人間は、例外無く、自分の作品を一個の生物であり、ひとつの意志を以て成長する有機的な何ものかとみるのです。あるいは、そう見えるのです。そうして、実際にそうなのです。言葉がひとつの細胞から分裂して増殖するのです。細胞とは、発想であり、アイデアであり、世界を解釈するための視点であり、言葉を与えられた視点、また従って、無意識から浮上する「存在象徴」なのです。安部公房が夢を備忘に残すことを大切に思ったのは、これらのことによります。

追記 2 :

「錨なき方舟の時代」(全集第27巻。267ページ。1983年。59歳)の対談で、インタビュアーの質問、「安部さんが戦中、ハイデッカーとかヤスパースとか、そういうものを非常に熱中してお読みになったということと、文学へ進んでいくこととは関わりありますか。」という質問に対して、次のように語っています。

「あったと思う。実存は本質に先行するという実存主義の基本概念、本質というのは一つの規定観念であり、その規定作業の前にもっと未分化の実存が先行しているという考え方、それがなぜぼくに

とってそれほど重要な思想だったかというのと、やはり戦争中だったからだと思う。」

この「本質というのは一つの規定観念であり、その規定作業の前にもっと未分化の実存が先行しているという考え方」は、安部公房の独自の變形のさせ方なのです。ほとんどの人間は、「実存は本質に先行するという実存主義の基本概念」を信ずることで終わった。

ここで、大事なことは、安部公房が「未分化の実存」といい、「未分化の」状態に言及したことです。

これは、安部公房の主人公達がみな、無名、無知、無能の位置にいるということとを、別様に言い表した言葉だからです。

無名で無知の人間は、そのまま、自分自身を未分化の状態に置き、未分化であるということは、閉ざされていなくて、開かれていて、安全安心の日常を超えて、遥かに外側へと出て行く人間である、外部と交流をする人間であるからです。無名で、無知であるが故に。

この場合、開かれているという状態は、そのままエロティックな状態でもあります。安部公房の小説に登場する主人公が、女性に対して抱くエロスの感情の源がここにあります。

追記 3 :

追記 2 で述べた未分化の状態にあって、物事を問う場合の問いは唯一次の問いです。それは、

それは何か？

という問いです。

2003年の世田谷文学館での安部公房展の図録を拝見しますと、その113ページに「1976頃から使っていたメモカード」というカードの写真が載っています。

そこには、進歩とは何か、患者とは何かという問いを立てたカードを見る事ができます。

そうして、安部公房は、自分の言葉で、その概念を定義しているのを見る事ができます。

これが、未分化の状態の人間の問いであり、その行いである定義というものです。

無名であり無知である人間の根底にある行為は、このように物凄く単純であり、明解な行為なのです。

他方、言語という観点からこのことを論ずると、安部公房が日常の多様な複雑多岐に亘るアナログの情報を頭の中で全く論理的にデジタルの明晰な曖昧なところの一切ない論理に変換し、言語によって再びアナログの情報として含みの多い多義的な解釈をゆるす言語表現に変換するという、このカードはその行為そのものを証拠立てています。（ここから先は、安部公房の言語論になりますので、また稿を改めて論じることになります）

このアナログ・デジタル変換、またデジタル・アナログ変換を、創作原理という観点からみると、上に述べた象徴の統一ということになるわけです。

感想の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの感想をお待ちしております。

もぐら通信を読んだの、どんな感想でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、もぐら通信に掲載してよいかどうかを付記して下さい。

掲載の許諾を戴けたら、次号に掲載したいと思います。

編集部一同、ここからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

安部公房誕生の秘密

～安部ヨリミの「スフィンクスは笑う」を読み解く～

岩田英哉

I 何故「スフィンクスは笑う」を読むのか？

安部ヨリミの「スフィンクスは笑う」を読む前に、予（あらかじ）め、準備のために、わたしは次の文章を書きました。

「安部ヨリミの「スフィンクスは笑う」を読んで、わたしは何をしようとしているのだろうか？

人間は似たもの同士を集めて、意義と意味を見出す生物であるからして、安部公房の母親の書いた小説が、息子たる安部公房の小説のここによく似ている、あそこによく似ているということを行うことになるのだろうか？それを言ったとして、何になるのだろうか？

何にもならない。何故ならば、そもそも安部公房の小説の主人公はみな、親のいない子供、みなし児、孤児、家というものも家族というものも無い、人間として素っ裸の無名無能無知の男が主人公だからです。

これは、安部公房がその父親や母親と葛藤があったことは、人並みにはあったことでしょうが、一番大きな理由は、既に10代でそうであったように、安部公房が自分自身を全く孤独にして考える、あるいは人間というものを一個の人間として全く孤独にして考えるという、哲学的、思弁的な姿勢に大きい理由があるのだと思います。

やはり、わたしが安部ヨリミという女性の小説を読みたいと思ったのは、それは、このひとが、安部公房の母親であるからです。ということは、なんらかの親子関係を、この母親の小説と、その息子の小説との間に、もしあれば見たいと思ったことを意味しています。

さて、冒頭の問いです。では、そうだったとして、それが何だというのでしょうか。この親にしてこの子ありという結論があればよいのでしょうか。それはそれで、余りに陳腐な結論だと思われる。

さて、以上のように前もって考えておいて、実際に「スフィンクスは笑う」を読んでみましょう。

それは、結局、この「スフィンクスは笑う」とは何かという問いに答えることになるでしょう。もっと大きく言うと、安部ヨリミという作家にとって、小説とは何であったのかという問いにもまた答えることになりまます。即ち、いづれにせよ、この「スフィンクスは笑う」という小説の質（quality）の問題を問うということになります。更に即ち、安部ヨリミという人間は、何故この小説を書いたのか、また書かなければならなかったのかという問いに対する回答をするということでもあります。」

これらの問い、「スフィンクスは笑う」とは何かという問い、「安部ヨリミという作家にとって、小説とは何であったのかという問い」、また「安部ヨリミという人間は、何故この小説を書いたのか、また書かなければならなかったのかという問い」に対する回答をするということが、この作品を読み、以下の文章を書いて、十分に出来たのではないかと思います。そうして、誕生した安部公房が何故そうなのかということもまた。

II 安部公房の誕生

この小説は、一言でいうと、恋愛小説、もっと言えば、恋愛・愛憎小説です。

次のような登場人物が複雑な恋愛関係を持って、話が展開します。

- (1) 小野道子 (小野一郎の妹。渡辺安子と親友である。同じ松本謙輔を愛する)
- (2) 小野一郎 (小野道子の兄。松本謙輔と親友である。同じ渡辺安子を愛する)
- (3) 渡辺安子 (小野道子と親友であり、同じ松本謙輔を愛する。謙輔に捨てられ、謙輔の親友小野一郎と婚約するも、その間義兄 (医師) に診療室で手籠めにされ妊娠し、失踪。野田という男を誘惑して、北海道で百姓の生活を始める)
- (4) 松本謙輔 (渡辺安子と相思相愛であり、肉体関係を持つが、親友小野一郎の安子に対する愛情の深さを感じて、身をひき、安子を捨てる)
- (5) 渡辺安子の義兄 (安子を手籠めにし、その前には、安子の兄の嫁澄子を手籠めにしている)

こうして登場人物と、それぞれの身に起こった事件を書いてみると、主人公は、渡辺安子という女性であることがわかります。小野道子の作中の言葉を借りれば、「第一の男に処女を奪われ、第二の男に恋を誓い、第三の男の子を妊娠だ」女性です。

さて、小説の梗概は、このようなものだとして、先へ進みます。

問題は、小説そのものもさることながら、この小説の後に書いてある跋と題した短い後書きに奇妙な、いやもっと明瞭に言えば、異様な言葉があるのです。それは、次のような言葉です。

「五日には私達の二人の父一彼のと私のと一がパンを背負って、私達の遺骨を拾いに来た。そして、生きた子供を前にして祝杯を上げた。」

この時まだ、安部公房は、母よりみのお腹の中において、この世に生を受けておりません。それなのに、それぞれの父親たちが、生きている新婚のふたりの夫婦を恰も死んだ者のごとくに遺骨を拾いに来たといい、まだこの世に生を受けていない子供を生きた子供とって、祝杯をあげるという。

祝杯を上げたというのですから、そうしてそれは「生きた子供を前にして」上げた祝杯ですから、これは子供の誕生を祝福した祝杯であることに間違いありません。

しかし、一体この書きようは、恰もというよりは、もう事実としてそうであるという断然たる書き方になっています。これは、一体どういうことでしょうか。

このふたつの文から、わたしがわかることは、次のようなことです。

1. この夫婦には、二人だけの誓いのような全ったき秘密があること。
2. その二人の心中秘密に共有して抱いた秘密の本当のところは、ふたりの両親は知らないけれども、外面的な出来事から、二人の婚姻の事情については、親として何か特別な事情を十分に知っていたということ。
3. 子供が生まれることが、この夫婦にとっては、この世に、この生に対して自分たちの死であり、葬式であったということ。
4. そうして、お腹の中にある生命は、既にしてこの世の中に無いものとして生きているものだと認識していたということ。

(このような夫婦、ある意味では多分同志的な、しかし生において否定的な紐帯を共有した夫婦の、その夫、浅吉のチフスという病気による若い死は、何か偶然ではなく、運命の必然を思わせる。)

この小説は、安部ヨリミが小説を書いている間、未だ名付けられていない安部公房がお腹の中で成長している間に書かれた小説です。この小説が1923年(大正12年)の12月に脱稿して、翌年3月20日に出版され、その2週間前の3月7日に安部公房が生まれている。跋文から、安部ヨリミの言葉を引用すると、次のようになります。



安部ヨリミ

「私達の胎内の子供は大きくなって行った。私はそれを思っ恐怖に捕らえられた。私にはもっともっと、静かな二人の生活がほしかった。(中略)子供の愛が霧のように私を包む頃には大正十二年も暮れようとしていた。

来年は、私達の赤んぼの出来る年だ。
来年は、私達の本の出来る年だ。」

母親の胎内での子供の成長に対する感情として、最初は「恐怖に捕らえられた」ということは、普通の母親の感情とは、少し違うように思われる。上の3に書いたような事情が伏在していたのではないだろうか。

安部公房の娘、安部ねりさんの「安部公房伝」(17ページ)によれば、「安部家のあまり好意的でない風評によればヨリミが浅吉の東京の住まいに押し掛けたという。」とあるのも、このような事情のあったことをある程度示唆するものではないかと思えます。

それから、「私達の本」と呼んでいることから考えても、この小説の執筆の間浅吉にその話をしたということの他に、やはり、わたしはこの小説には、私小説ではないにしても、ふたりの間に何らかの恋愛の愛憎の事件があったのではないかと思う。それ故に「私達の小説」、即ち、わたしたち二人の人生を表した小説という意味の言葉を使ったのだと思われる。

この小説を読んで、特に安子という女性の心情と境涯を叙する安部ヨリミの筆を通じて、わたしの知ったことは、次のようなことである。

5. 浅吉には、多分性的な関係のあった、浅吉を深く愛した相思相愛の恋人がいたということ。

6. そして、安部ヨリミは、その女性から強引に浅吉を奪い取った。勿論、浅吉もヨリミを愛していたとはいへ。

7. この「スフィンクスは笑ふ」という小説は、そのような女性に対する、ヨリミと浅吉の贖罪の小説であったということ。

8. 二人が婚姻を結び、新らしく出発して、生活を一緒に生きてゆくためにやむを得ざる理由で書かれた、これは安部ヨリミによる、そのような輻輳した男女関係と、その女性に対するふたりの感情を葬り去るための、いわば墓標であったということ、

即ち、「スフィンクスは笑ふ」という小説は、安部ヨリミの「終りし道の標べに」であったということ。

9. その堅(かた)い傍証としては、この小説の跋文の最後に、ヨリミは「一(終)一」と敢えてしるしているということ。この跋文を以て、何かが終わるのだという感情、終わらせるのだという意志を表しているということ。

このような夫婦の、上の1に述べたような



左から浅吉、公房、ヨリミ

全き秘密(perfect secrecy)と、上の3と4に述べたような生に対する倒錯ということのできる逆理、この場合、普通の人間が、生の連続として考える親と子の関係という意識とは逆の論理の中に、またその中から、1924年(大正13年)、安部公房は誕生した。安部家の長男として、即ち、安部家の将来の家長として。

この生まれ方、この出生の逆理からそのまま解くことは、安部公房の10代の小説「題未定(霊媒の話)」から、最晩年の遺作「飛ぶ男」に至るまで、繰り返し現れる、安部公房の主要な主題のひとつ、贖の父親という登場人物が、安部公房のこの両親のいない子供、即ち孤児の感情に裏打ちされているものだという事である。

人間は眼に見えないもののから生まれ、その中で生きている。

また、この出生の逆理から思うことは、安部公房の主人公の抱く女性に対する愛情の在り方、即ち、ひとつはまだ成熟していない少女、性の未分化の状態の少女に対する

エロスであり、もうひとつは、逆に成熟した娼婦型の女性に対するエロスである。安部公房の主人公は、いづれの女性に対しても、倒錯的な関係を持っていて、性的に交わることがなく、いつも屈折した禁欲的な態度を維持します。（わたしは倒錯と敢えて書いたが、それは事実としてそのままなのであって、安部公房にとっては倒錯ではなかったと思う。）

安部ヨリミが、「子供の愛が霧のように私を包む」と書いた「子供の愛」とは、母である自分が子供に対して抱く愛ではなく、普通はそういう意味にとりたくなるが、そうではなく、まだお腹の中にいて名付けられぬ安部公房という子供、この世には存在しない子供が母親である自分自身に対して抱いた愛という意味です。この意識のありようも、また愛という言葉の使い方もまた、安部ヨリミに独特です。また、逆にまだ名づけられぬ未生以前の安部公房の立場からいうと、既に愛する者としてあったということになるでしょう。

この「子供の愛」という言葉は、上の4に「お腹の中にいる生命は、既にしてこの世の中に無いものとして生きていくものだ」と認識していたということ」と書きましたが、そのことに符牒が合っているのです。

最後に蛇足を付け加えれば、安部ヨリミという女性がこの恋愛小説に付けた題名「スフィンクスは笑ふ」の命名の仕方、小説の内容と一見無関係なこの連想の飛躍の仕方は、どこかしら安部公房の連想の飛躍に似ています。作中に何かスフィンクスが出て来るわけではないのです。

スフィンクス。スフィンクスは、自分の前を旅人が通ると、謎を掛け、「朝は4本足、昼は2本足、夜は3本足。これは何か」という謎を出し、回答を間違えた者を食べていたというスフィンクスです。

母、安部ヨリミがスフィンクと呼んだ同じものを、息子、安部公房は早々と10代で存在と呼んだのです。

安部ヨリミは、1990年に91歳で亡くなっています。安部公房の死の3年前です。息子の作家としての人生を十分みることができたでしょう。そうして、この小説を執筆した当時この母親が子供にかけた愛情は、やはり、この小説の主人公安子が自分の赤子に掛

けた、小説の最後の二行と同じであったことだろうと思います。

「(略) 永久に葬られた私だ。私はそれを惜しみはしない。

只、私は、此子供を、太陽の輝く白い道に送り出してやりたい。-----」

そして、「安部公房」が、誕生した。

III 終りし道の標べにとの逆想の類縁関係

「旅は歩みおわった所から始めねばならぬ。墓と手を結んだ生誕の事を書かねばならぬ。何故に人間はかく在らねばならぬのか?……あゝ、名を呼べぬ者達よ、此の放浪をお前に捧げよう。」

安部公房処女長編「終りし道の標べに」（真善美社版）のこの冒頭のエピグラムの「墓と手を結んだ生誕」という逆説的なフレーズは、この一文の冒頭に引用した安部ヨリミの跋文の引用を強烈に思わせる。勿論、安部公房にとって、このエピグラムは逆説では全然ないのだ。その母にとっても、その引用がそうであったように。たとえ、それぞれ、その作品を書いた契機が異なっていようとも。

IV 手紙または手記という形式

興味深いことに、安部ヨリミの書いた「スフィンクスは笑う」という小説では、愛憎のもつれた男女間の意思疎通に、手紙と手記が重要な役割を演じています。明らかに、手記と手紙と二種類の形式を勿論意識的に作者は使っています。

この言わば、安部ヨリミにとっての、またこの夫婦にとっての墓標というべきこの作品の手法が、そのまま10代の安部公房の「第一の手紙～第四の手紙」（1947年。23歳）の手紙形式の作品となり、20代の始めの「終りし道の標べに」（同年。同歳）での手記形式の作品となっていること、更にこの手記という形式は、その後生涯に亘って安部公房の好んだ、そうして洗練させていった小説の形式であったということに、一脈通ずる以上のものを、敢えて言えばその因縁、因果を覚えずにはいられません。

V スフィンクスの謎

スフィンクスを漢字で表すと、獅子女と書きます。

これは、安部ヨリミが自分自身のことをスフィンクスに譬えて、自分自身がスフィンクスとして笑う対象としてあるそのような男女の愛憎という意味の、小説の題名であるでしょう。

そうだとしたら、この女性の苛烈性、徹底性は、物凄きものだと思われます。この、小説の題名そのものが、一種の謎掛けだということになります。そのような謎を掛けて、自分自身の人生を封印する。これはやはり、自分自身の青春の人生を葬り去ってまでして、浅吉と結婚した女性にこそふさわしい。そうしてまた、お茶の水女子大学を中途退学させられた経緯は確かに獅子女だと思います。

しかし、ヨリミは浅吉に、この題名の秘密、謎を話したのでしょうか？もしこのような謎掛けだとしたら、それは普通に考えると、浅吉思に伝えることができなかつたことだろうと思います。更にしかし、もしヨリミが浅吉にその題名の意味を明かしたとすれば、浅吉も、そのところが傷ついたと思いますが、しかし、互いに赦された恋人同士、夫婦として、否定的な紐帯を共有した更に強い夫婦として、あったということになります。ヨリミは隠さず、伝えたと考える方がよいかも知れません。

VI 安部公房の芥川賞受賞と安部ヨリミの詠んだ歌

「郷土誌あさひかわ」の1993/7月号の安部公房追悼特集に三浦綾子さんの書いた文章によりますと、1951年に安部公房が芥川賞を受賞したとき、安部ヨリミは北海道旭川にいました。旭川で当時、アララギ派の短歌の会に出席をしていたときに詠んだ歌があります。

文学賞に輝くと言ふは誰の子か 石狩に耕して吾疲れある

スフィンクスは笑うを読んだ後にこの歌を読みますと、作中の安子のことが思われてなりません。ヨリミが安子という作中人物（主人公）であり、安子と同じ生活をしているのかと思われるほどに。

- (*) VI章の歌のあることは、wlallenさんにご教示を戴きました。
- (*) 安部ヨリミと安部家3人の写真、それから「スフィンクスは笑う」の表紙の写真については、講談社文芸文庫出版部に使用許諾を戴きました。快諾して下さった同部松沢賢二氏にお礼を申し上げます。



18歳、19歳、20歳の安部公房

麿岩田英哉

19歳の安部公房

安部公房は、19歳のときに「僕は今こうやって」を、20歳の時に「詩と詩人（意識と無意識）」というエッセイを書いている。

「僕は今こうやって」というエッセイは、一言でいうと、18歳のときに書いた「問題下降に依る肯定の批判」で論じた内と外の問題に加えて、それ以外に「転身」または「変容」と呼ぶ個人の意識の次元変位的なありかたの重要性に言及したものである。

この転身と変容については、安部公房が20歳のときに書いた「詩と詩人（意識と無意識）」に深く考察されているので、これは20歳の安部公房を語るときにみとめることにしよう。

この10代の安部公房の作品と主題を整理すると、次のようになります。

1. 18歳
(1) 作品の題名：問題下降に依る肯定の批判
(2) 主題：内と外
2. 19歳
(1) 作品の題名：僕は今こうやって
(2) 主題：外面と内面
3. 20歳
(1) 作品の題名：詩と詩人（意識と無意識）
(2) 主題：転身または変容

さて、19歳の安部公房、「僕は今こうやって」を書いた安部公房の話です。

この「僕は今こうやって」の主題は、外面と内面です。

以下、安部公房の言葉に耳を傾けつつ、その言わんとするところを尋ねたいと思います。

「僕は今迄総てを内と外に分けなければ気が済まなかった。勿論内と外に分ける事はこれ

から先も永久に続く事には異いなければ、もっと大きな事があるのを忘れていたのだ。よく考えて見れば僕達が普段内面と言っている様なものは、全て外面から来る想像に過ぎなかったのではないだろうか。」

このような文章を読むと、安部公房という人の発想の型がわかります。通俗的に理解された意味の関係を一端解いて、そうしてそれらの意味を互いに入れ替えるという思考です。

普通、わたしたちは外面という、何と云う事もなくただ外面と言葉のいうままに思っている。内面というまたそうである。しかし、安部公房は、内面は外面なのではないだろうか、正反対のものを結びつけて、それまでの意味の関係をひっくり返してみせるのです。

即ち、外面とは何か、内面とは何かを考えることになります。この問いの立て方が、既に哲学であり、安部公房の思弁的な文体を生み出す土壌となっています。

安部公房の問いの立て方を引用すると、次のような文があります。

1. 「第一、僕達が何時か真剣になって外面の事を考えた事があつただろうか。」

2. 「一体僕達の知り、そして感じ得るものに外面で無いものがあつたであろうか。『僕』がと云う事が既にもう外面のしるしだつたのではないだろうか。（略）僕達の立つ所総て、僕はそれを外面と呼ぶのだ。」

3. 「では内面は？ そうだ、それが問題なのだ。（略）今の所、しかし、僕が其の内面について言える事は唯次の事丈なのだ。つまり面の接触を見極める事なのだ。努力して外面を見詰め、区別し、そしてそれを魂と愛の力でゆっくりと削り落として行く事なのだ。そして特に、僕達が為し得る事は、そして為さねばならぬ事は、その外面を区別し見る事を学ぶと云う事ではないだろうか。」

こうしてこれらの文を読むと、安部公房の思考の質 (quality) が実によくわかります。

それは、世界を面として捉えているということです。そして、それを内と外という視点から見て、内面と外面と呼んでいるということです。この幾何学的な捉え方、そうして、その空間的な形象を内と外という視点からひっくり返してみせること。これは、安部公房が好きな位相幾何学の感覚なのだと思います。しかし、位相幾何学から発想したのではなく、そのような発想があって、詩や小説や数学の理解が生まれたという順序で考えることが正しいことでしょう。

自分自身も含めて外面と考えるという考えは、奇抜です。そうして、更に内面があって、その内面と外面の接触面を注視し、その面のことを思考する。そうして、そのように思考するもう一人の自己がある。これを、20歳の「詩と詩人 (意識と無意識)」では、更に深く考察を進めているのです。

このような10代の安部公房のものの考え方は、20代以降に書かれる小説の主人公の思考と意識のあり方に通じていると思います。

もうひとつ、安部公房の創作の秘密を明かした文章を次に引用します。つまり、安部公房は、どうやって小説を創造したのかということです。この引用は、強くリルケの詩を思わせるものがあります。ほとんどリルケであるといっても、よいと思います。

「例えば今此の庭に立つ見事な二本の樹木を見給え。見る見る内に生が僕の全身から流れ出して其の樹の葉むらに泳ぎ着く。何と云うゆらめきが拡がる事だろう。僕の心に繋がるうとする努力がありありと見えて来る。」

もし、この文章だけで終わるならば、それは安部公房の「マルテの手記」に留まることでしょうが、安部公房は、そこから更に歩を進めるのです。次の20歳の安部公房を知るために「詩と詩人 (意識と無意識)」を読むと更によく判りますが、安部公房という人間は、決してただその芸術家や哲学者の作品の思想を受け容れて、それを享受するだけに留まらず、必ず自分流に換骨奪胎して、全く独創的な姿にそれらを変形、変容させるのです。まさしく自らが言うように「面の接触を見極める事なのだ。努力して外面を見詰め、区別し、そしてそれを魂と愛の力でゆっくり

と削り落として行く事」を通して、どんな物事も自家葉籠中のものとしてしまうのです。安部公房のこの変形させる力、即ち概念化の能力には、凄まじいものがあります。

概念化の能力は、優れた芸術家や哲学者がひとしなみに持つ言語能力です。

さて、そうして、庭の二本の樹木を見て、安部公房は更に思考を進めます。

「さあ、此処で僕達が若し最善を發揮しようとしたならば一体何うすべきなのだろうか。こんなに僕を感じさせる或るもの、そこにある秘密を見抜く可きであろうか。いやいやそんな事ではあるまい。それは限りある行為であり外面への固定に過ぎないのではあるまいか。」

安部公房は、決して一面的にしかものを見る様なことはしません。この文にあることは、そのことの否定です。生というものは、そのような一面的な理解では理解することができない。何よりも生は動いているのであり、それでは生の外面が固定されてしまうからです。

「僕は生に近づく為には目的も方法も無いと思っている。生は対象として捉え得る性質のものではないのだ。生を思考する方向はあっても、生の方向と云うものは決してあり得ないのだ。」

一言でいうと、生は方向を持たない謎であるということです。これも、後年の小説の主人公達の造形の根底にある作者の意識だと思います。

「僕達が為し得るもの、いわんや言葉は、唯生の窪 (くぼみ) を外面からけずり取る事丈なのだ。」

この、言葉によって「生の窪 (くぼみ) を外面からけずり取る事」を、後年安部公房は、消しゴムで消すといったのです。それは、文字通りに消しゴムで消す行為です。「それを魂と愛の力でゆっくりと削り落として行く事」、これが安部公房にとっての作品を創造する意味でありました。

このことは、次の「詩と詩人 (意識と無意識)」(20歳)では、転身といい、変容といわれて、存在論の観点から更に深く思考さ

れているのです。

この「生の窪（くぼみ）を外からけずり取る事」は、造形的な感覚であり、また譬喩（ひゆ）として考えて、安部公房は自らをもぐらに擬していたのだと思います。もぐらの初見は「終りし道の標べに」（23歳）に、そして最晩年には文字通りの「もぐら日記」という題名に至る迄、一生を通じての感覚として見る事ができます。

20歳の安部公房

安部公房の思考する問題は18歳のときのエッセイ「問題下降に依る肯定の批判」を離れることはありません。継続的に、意識して、問題下降と概念から生への没落を自分の頭で考え抜いたのです。その10代の到達点が「詩と詩人（意識と無意識）」です。

これは、人間とその意識のあるべき姿を論じた存在論ですが（安部公房は認識論的に論じることがない）、これと表裏一体となって、無名詩集ができています。その無名詩集中の詩の吟味は後日にしようと思います。少なくとも、特に哲学用語のよく出て来る初期の小説は、そのイメージも、比喻も、言わんとするところも、「詩と詩人（意識と無意識）」というエッセイを読むことで理解することができるのです。また哲学用語を使わない小説であれ、このエッセイを読むことで、晩年に到るまで、その小説が何故そのようなイメージや比喻や、従ってそのような文体で書かれているかを理解することができます。このエッセイを読むと、安部公房は、10代から晩年に到るまで、終始一貫、首尾一貫していることが解ります。

本題を少しはずれますが、1947年6月17日付（安部公房23歳）の中埜肇宛て書簡の中で、無名詩集について「此の詩集で僕は一応是迄の自分に解答を与へ、今後の問題を定立し得た様に思っております。」と書いています。中埜肇は、成城高等学校の時代から、安部公房の哲学的な思索について議論をしてきた友人達のうち、特に重要な友達です。それまでの思索の成果が無名詩集であるといっていることは明記すべきことです。他方、そうやって議論もし、その間思索してきたことの成果は、「詩と詩人（意識と無意識）」（20歳）にまとめられていると考えたい私は思います。

即ち、「詩と詩人（意識と無意識）」と無名詩集は、それぞれ安部公房の理論篇と実践篇の関係にあるのです。

その事を証明するのは、1947年7月5日付中埜肇宛て書簡の中の、次の文章です：

「僕が最初に実存哲学なるものを発見したのは、キエルケゴールやハイデッガーに於いてよりもむしろ、リルケとニーチェに於いてだった。しかし是は勿論実存哲学とは名付け得ないかも知れない。とにかく僕は其處から出発した。そして四年間.....僕の帰結は、不思議な事に、現代の実存主義とは一寸異った実存だった。僕の哲学(?)を無理に名づければ新象徴主義哲学(存在象徴主義)とも言うか、やはりオントロジーの上に立つ一種の実践主義だった。存在象徴の創造的解釈、それが僕の意志する所だ。」

[註釈]

この存在象徴という安部公房独自の哲学用語の深い意味については、今月号の「もぐら感覚4：触覚」で、タ克蘭ケさんが書いていますの、それをお読み下さい。

(この稿続く)

もぐら通信の編集方針

もぐら通信編集部

1. われらは安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものである。
2. われらは安部公房という人間とその思想およびその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものである。
3. われらは安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものである。
4. われら自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うこととする。



編集者短信

もぐら通信の編集者は何をしているのか？

9月8日に3人が会ってから50日ほど。ブログ「安部公房の広場」と月刊「もぐら通信」2号を出すまでになった。この間、疾風のごとくwebをメールが飛び回り、東京・京都・兵庫を固く結んだ。メールは160通にもおよぶ。そして自分の発した言葉によって自分のなすべきことは雪だるまのようにふくれあがる。そんな時「楽しんでやろう」という言葉にふと我に返り、気が楽になる今日このごろです。
[hirokd267]

拙稿を書くために全集を参照したのですが、気づいたら狭い部屋が箱だらけに。さらに、そこに宅配便が来て・・・別な意味で、箱男になりました。

また、私は将棋が大好きで、「将棋倶楽部24」という対局サイトを愛用しています。5級のヘボですが、ゴキゲン中飛車という戦法が好きです。私のようににはまると、「勝つと生きていてもいいと思う。負けると、死んでしまいたくなる」の思いに駆られるヤバいゲームです。 [w1allen]

このところ、新潟の酒で鶴亀という酒にハマっています。瓶詰めの種類もあるのですが、わたしがハマっているのは、ワンカップの酒です。

どこがいいのかというと、旨いということは勿論ですが、そのラベルが古式ゆかしく、古典的なスタイルを維持していることに惹かれて飲んでいるわけです。呑ん兵衛というのはいたるところに理屈を見つけては飲むことのできる人種ですが、このラベルはこの酒を選択する十分な理由を与えてくれているというわけです。いいラベルなので、写真を載せますので、一緒にご覧下さい。 [タ克蘭ケ]



編集後記

創刊号は、11ページでしたが、第2号は、28ページと約2.5倍の分量になりました。

勿論分量が多ければいいというものではなく、質が大切ですが、今回執筆して下さった方々の文章は、十分そのことを証明して下さっていると思います。これも一重に、ご寄稿戴きました、岩井枝利香さん、富士原大樹さん、柴田重宣さんの力によるものです。この場を借りて、感謝申し上げます。またご寄稿を戴くことを願っております。

このもぐら通信は、安部公房の小説の主人公達のように、また安部公房の言語論がそうであるように、いつも、あなたに開かれた媒体でありたいと思っています。

あなたのご寄稿、または感想など、お寄せ戴ければ、幸いです。

では、また次号にてお目にかかりましょう。

安部公房の広場 連絡先: eiya.iwata@gmail.com

差出人:

安部公房の広場

〒182-0003東京都調布市若葉町
「閉ざされた無限」

2012年10月31日 第2号

来月号の予告

来月号には、次の記事を予定しています。

- 1。安部公房の愛の思想2 (仮題)
- 2。燃えつきた地図について (仮題)
- 3。『鉛の卵』小論 (仮題)
- 4。もぐら感覚5：窓
- 5。安部公房の変形能力：エドガー・アラン・ポー
- 6。18歳、19歳、20歳の安部公房：20歳の安部公房 (続)